
生誕 ~ The wing of the time ~

葉月瞬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生誕 The wing of the time

【Nコード】

N0673X

【作者名】

葉月瞬

【あらすじ】

村が何者かに襲撃され、少女は一人森の中へと入っていく。かつてそこは聖女の通った場所。世界樹の元へと。しかし、村は滅ぼされ、少女は一人になるのだった。

おとぎの森というサイトに掲載しています。

一、襲撃（前書き）

残酷描写がありますが、真似しないように。

一、襲撃

その一族は左程大規模ではない部族だった。

部族を維持していくのに事足りる人数しかいなかった。

そして、その部族には特殊な力が宿っていた。

その力とは、治癒の力である。

ありとあらゆる傷、毒素を治癒する力がその部族には宿っていた。なぜ、その部族にそんな力が宿ったのかは未だに解明されていない。一説によると、神々の血を引いているのだという事だが、真実は定かではない。

何れにせよ、ヒーラーという職業は彼等の為にあるようなものである。

その部族の存在が、周辺の町の人々には大変重宝していた。

傷を癒してくれる。

病を治してくれる。

毒を治癒してくれる。

故に、周囲の町の人間からは畏怖の念の入りに交じった敬愛を受けていた。

ある日、その小数部族に凶報が舞い込んだ。

女だてらに部族の長を務めていた、聖女カルツォーネの死去である。

彼女がこの世から去ると同時に、生誕した女兒が一人いた。

後にキステイス・カルツと命名される女兒である。家族、並びに周囲の人々は驚喜し、この子こそ、聖女の生まれ代わりではないかと口々に噂し合った。

キステイスとは、その部族の言葉で「聖なる吾子」という意味である。

キムサンとキムジンの間に生まれた愛くるしい赤子は、女の子だ

った。珠のように白く艶やかで、聖女カルツォーネの面影を写し取ったような子であった。

産れたばかりで、未だ力の片鱗を見せてはいないものの、その力量をそこはかとなく推し測る事は出来る。とてつもない力量を持った子供である事は、明白であった。

元々英雄キムジンとキムサンとの間に出来た子である、という事から周囲の期待は大きなものであったが、予想を上回る力量の大きさに皆驚きを隠せないでいた。

聖女の生まれ変わりなのではないか……？

そう、実しやかに囁かれ出すのに時間はかからなかった。

母親であるキムサンは、キステイスを産み落とす前日に聖女カルツォーネの生霊に出会っていた。俗に言うドツペルゲンガーと言うやつで、キムサンが臥せっている天幕におもむろに入るなり、このたまった。

『明日生誕するであろう貴方の子は、悲劇的な運命を背負っている子。……可哀想に……。何時かこの村を追われる事になるであろう……。その子が悲劇に打ち負けないように、私が盾となり、守ってあげよう……。影となり、光となって……。』

キムサンに言葉はなかった。キムサンの咽喉から漏れたのは、声にならない声だけであった。

後に残ったのは、内なる疑問。事情が解らぬ為の、動揺であった。キムサンに、未来を見通す力が無かったからである。

この事をキムサンは、キムジンには話さなかった。

考えに考えた結果、結局自身の胸に秘めたのである。

今まで夫に対して秘め事をする事が無かった為、良心の呵責に苛まされたが、いらぬ心配もさせなくなかった。

かくして、聖女カルツォーネの生霊が来訪した翌日、運命の子が誕生した。

カルツォーネの死去と同時に誕生したその子は、キステイス・カルツと名付けられた。

珠の様に白く透き通った肌と、光の加減で青灰色にも見える銀色の髪を持った、見目麗しい女の子だった。

カルツォーネの守護が関係しているのかどうか定かではないが、キステイスは部族の歴代を見渡しても未だかつて無い程の力量の持ち主としてこの世に産れて来た。

此れから始まる悲劇を暗示しているかのごとく、彼女の青灰色の瞳は暗く、そして重かった……。

キステイス・カルツと名付けられた少女は、美しく育っていった。美しく、そしてとても勝ち気な少女だった。

特に意識する事も無く治癒の力を高める事が出来、「あたしに不可能は無いわ！」が口癖で本当にその通りになったりする天才肌の少女だった。

少女は誰よりも強い力の持ち主で、誰からも頼られる性分だった。幼き頃からずっと、その力を披露する事を周囲の人々から求められてきた。だが、母親はそれを善しとしなかった。むしろ力を抑える様にと、諭すばかりだった。

「むやみやたらと癒しの力を使ってはいけません。その力は、己の為に在るのではなく、他人の為に在るもの。使うべき時に使えば、それで良いのです」

聖女カルツォーネの予言が気掛かりなキムサンは、口癖のようにその言葉を自分の娘に言い聞かせた。

癒しの力は、使い方によって破壊の力をも生み出す。それゆえ、『癒しの力を逆さまに使うてはいけない』というのがこの村の古くからの教えであった。

キムサンはそれを恐れていたのかもしれない。

癒しの力のより強い者が逆さまに使うと、より大きな破壊の力を生み出す。その力は未知数である。だからこそ、言い聞かせなければならなかった。

悲劇を未然に防ぐ為に……。

悲劇はいつも、突然訪れる。

何の前触れも無く、物騒な男達が集落にやってきた。

何かを探している素振りを見せている男達を、村の者は皆一様に客としてやって来た者だとばかり思い、見守るばかりだった。

実際この村にとって、外から来る客人は珍しくはなかった。依頼を受け村人が出張に行く事もあれば、外の世界から直接この村に依頼を持ち運んでくる客人もいる。この惑星アリータに生活圈を持っている者達にとって、この村の住人達は医者のようなものだった。

今まで、依頼され、治癒する事によって生活の糧を得てきたこの村にとって、外部の人間が村に来る事は依頼人が来る事と同義だった。だから今度の客人も、依頼人として受け止めていたのだ。

だが、彼等は依頼人ではなかった。

あくまでも探し物をしていたに過ぎなかった。

そして……見つけた。

その時、彼等がこの村にやって来た本当の理由が、誰の目から見ても明らかになった。

彼等が探していたのは、“キステイス・カルツ”だった。

彼等の正体は、何処かの国の隠密だった。恐らく、何処かの国の国王か、大臣の差し金だろう。

その隠密の魔手がキステイスに伸びようとした刹那、キムサンが立ちはだかった。

キムサンは隠密の手首に手を伸ばし、触れ合った瞬間に力を使った。

逆さまに。

その隠密は低く、小さく呻くとその場にしゃがみこんでしまった。見ると、手首がはちきれんばかりに腫れ上がっていた。それは正しく肉塊と呼ぶに相応しい。

彼の表情が醜く歪んでいる。そして、何か言葉を発しようとして口を開きかけた途端、一際大きな激痛が彼の隠密を襲った。

小さな破裂音が辺りに響くと同時に、手首が弾け飛んだ。

まともにキムサンの攻撃を受けた隠密は、右腕から血を滴らせな

から後方に下がる。後から来た仲間には注意を促しながら。

「気を付ける！ 得体の知れない力を使うぞ」

キムサンは、自分の娘に小さく教示する。

「先程の出来事、これから起る事、しっかり見ておきなさい。力を逆さまに使うという事がどういう事か、その眼に刻んでおきなさい」
力を逆さまに使う　この部族特有の治癒の力を逆さまに使う、
と言うことは禁忌とされていた。

治癒能力は元々、己の内にある神聖なる気の力を患部に当てることにより、人間が本来持つている新陳代謝を促進させ、傷口を塞ぐものである。それを逆さまに使うと言うことは、体組織を内側から破壊すると言うことだ。この技を受けた者は、生物である以上は死は免れない。

キステイスは無言で小さく一つうなずくしかなかった。

いつも見ている母の背中が、なぜか大きく見えた。

キムサンは声を張り上げて、方々に訴えかけた。

「お願い！ 誰か手を貸して！！ 私一人じゃ、この子を護り切れない」

キムサンの必死の呼び掛けに応じるように、今まで様子を見守っていた村人達がキステイスの前に集い壁を作った。

「私たちのキステイスちゃんに指一本だって、触れさせてなるものか」

誰かが叫んだ。

「ありがとう、皆……」

キムサンは瞳が潤むのを覚えた。

多勢に無勢だったのが、キムサンが方々に声を掛けた時を境に形勢が逆転した。

人々が群れ集ったおかげで、キムサンの側が数の上で圧倒的に有利になった。

隠密達は押される一方だった。

あちこちで破裂音が響き、隠密達は怯み、逃走する者達が続出し

た。

彼等にとって、得体の知れない力だった。

見えない何かによつて身体が引き千切られていく。それは、かつて味わつた事の無い恐怖だった。

幾千、幾万の戦場を潜り抜けてきた兵ですらも戦慄を覚える力だった。

彼等は暗部として暗躍して来た殺し屋だが、生身の人間である事には違いが無い。その場から逃げ出したとして、誰が責められるだろう。

逃げ出した者達の逃げ場を塞ぐのは、地の利を得たキムサン達にとって容易な事だった。

この集落は、キムサン達が生まれ育つた集落だ。子供の頃から駆け回つていて、何が何処にどういう風に置いて有るのか知り尽くしていた。だから、道端に転がっている石ころでさえも、有効に利用する事が出来た。

キムサン達は逃げ惑う隠密達の一步前に先回りし、ブービートラップを仕掛けた。

狩りをする時に用いる手法と、同じである。

キムサン達大人の者は皆、生きて行く為に狩りをし、自給自足をしていた。生きて行く為に手に入れた手法が、意外な所で役に立った。

地の利を得ていない上に混乱をきたしていた隠密達は、キムサン達の仕掛けた罠に面白い様に掛かつて行つた。凶悪な罠に掛かり命を落とすもの、命からがら逃げ出すものと様々だが、共通点が一つだけあった。皆一様に混乱の極みに達している、という事だ。

なぜ自分達よりも戦う能力に於いて劣っているもの達に、自分達が殺られなければならないのか。

実際自分達が地の利を得ていないのは自明の理だし、隠密達もその辺を考慮に入れて行動してきた筈だ。しかし、彼等にとって解らない事は、村人達がこぞつて彼等の任務を阻止するように動いてき

た事だ。

“少女”を手に入れ、無事に帰還する。

それは単純な任務の筈だった。必ず成功する筈だったのだ。それが、今、失敗に終わろうとしている。凄腕の自分達が殲滅されようとしている。隠密達にとってそれは、信じ難い事だった。

(“少女”に何があるんだ!?)

隠密達のリーダー格の男がその考えに至った時、不意に思考が途切れた。

待ち伏せ。

リーダー格の男が、其の者に視線を移した時を境に戦闘は開始された。

リーダー格の男は、懐に忍ばせていた短刀に手を伸ばす。そして一瞬の躊躇いも無く、懐に飛び込んだきた若者に切り付ける。「あっ!」と声を上げると、その若者はあどすさる。

右腕には浅いが、確かに短刀で切りつけられた傷痕があった。見る間に紫色に腫れていく傷痕を見て、若者はうめいた。

(うかつだった……。短刀に毒が塗られていたのか……)

その若者の傷口を一目見るなり、隠密の男は勝利を確信した凄絶な笑みを見せた。

自分の、半ばやけっぱちに放った一撃が敵に傷を負わせた。それだけならばまだしも、相手は毒を被っているのだ。例え地形に盲目であったとしても、戦況は有利に働くだろう。隠密は瞬時にそう悟り、行動に移した。

即ち、敵を仕留めに向かったのだ。

(……勝てる!……)

かくして、再度一対一の戦闘が開始された。

リーダー格の隠密にしてみれば、この場から逃げ延びるための、命を賭けた戦いであった。

隠密の男は、一息に間合いを詰めた。短刀のとどく距離、自分が最も得意とする接近戦にもつれ込ませる為だ。

若者もまた、その短い間合いを利用するつもりだった。元々彼等の一族に伝わる“力”は接触しなければ発動しないものだったからだ。

若者は、隠密の動きに合わせて自らも動いた。双方ともに目で相手の動きを追跡する。

互いの戦闘力は拮抗していたが、ここへ来て若者の受けた傷とそこから侵入した毒素が牙を剥いた。

一瞬だが、若者の動きが鈍くなった。

隠密の男は戦闘のプロフェッショナル、僅かな隙でも見逃すことは無い。

体勢を崩した若者の腹部にナイフを突き立て、勢いよく裂いた。血液が霧吹き、辺り一面を赤く染め上げる。

若者の意識は暗転した。

戦いは一瞬で決着を見た。

隠密の男の予想通り、若者の死をもって戦いは終結したのだ。隠密の男はこれ以上この場に留まる事は意味が無いばかりか、命すらも落としかねない、とばかりに足早に立ち去っていった。村の外へと。後に残されたのは若者の死体と、彼から流れ出た血液で生まれた、血の海だけだった。

かくて一方的な戦いの結果、生きてその村を脱出できた隠密は唯一人だけだった。

だが、そのたった一人の男が、その村に不幸を招き寄せることになるのだった。

二、宰相・モリスン

場所は変わって、ここはとある王宮の一室。

恰幅のよい男が座り心地の良い椅子に座り、その丸い顔を苦々しげに歪ませていた。

男の目の前には例の村から帰還したばかりの、隠密の男が立っている。あの戦いで、唯一生き残って戻って来た男だ。

「……それでお前は、失敗しておめおめと戻って来たわけなの!？」

「はっ、申し訳御座いません」

「……ふんっ! ……よくわかったわ。この事はわたくしの口から陛下に伝えておくわよ。お前は、その傷でも癒していなさい」

「はっ、恐縮です……」

かつて、襲われた村人達が想像した通り、この恰幅の良い男は王宮の一室で職務に勤しむ宰相だった。つまり、あの隠密達はゼンスター王国の宰相が雇った者達だったのだ。

ゼンスター王国。

この大陸で覇を競う王国の一つである。このア大陸は三つの大国と、十の小国から成り立っていた。皆何処も王制を敷いているが、隣の大陸イにて、覇を唱えているミニナム帝国に対抗し得るのはゼンスター王国唯一つである、と言われている。その所以が、強大な軍事力と豊かな経済力である。他に二つの大国がゼンスター王国と対抗しているが、征服されるのも時間の問題なのではないか、と噂されている。他の小王国は推して知るべし、だ。その上、ゼンスター王国はミニナム帝国の支配を拒絶するため、さらに軍事力を強化しようとは画策しているらしい。その過程で例の少女の噂を耳に入れたのだ。“強大な力 治癒の力 を持っている少女” 彼女は利用価値がある。そう、国王に進言したのは、他でもない宰相自身だった。名をモリスンと言う。三十五の年月でゼンスター王国宰相の椅子ま

で上り詰めた男である。国王からの信頼も厚く、進言が容易に通る立場であった。

モリスンは戦争推進論者だった。実質彼が軍を取り仕切っているようなものだった。王国の群臣たちの中にあつて、智謀と野望は一、二を争うほどの持ち主だ。そして権力に対する執着も、群を抜いていた。彼の出自は謎めいていた。実際に、ある貴族がお忍びで遊んだ娼婦の子だとか、農家の家に生まれた三男坊、賊上がりの野蠻人などという、耳にすると気分を害するような噂話が横行するほどだ。モリスン自身、過去を話そうとしないので、周りの詮索好きな人々は憶測を並べ立てるだけ並べ立てて楽しんでいるのだった。しかし、それもまた一興、と彼は考えていた。彼の地位を脅かす程の事ではないし、国王さえ抑えておけば、誰が何を言おうと関係ない。国王に諫言を弄する者が出てこない限りは、自分の地位は安泰だからだ。

彼の今までの功績は、至極まともだった。血の滲むような努力によつて、今の確固たる地位を築いたのだ。若かりし頃のモリスンは野望は有ったが、金も、地位も、名誉すらなかった。「いつか、一国を動かすほどの男になつてやる」という野望だけを頼りに、まず学問を修めた。20代の若さで王立アカデミーを卒業すると、今度は経済力を付ける為に商売を始めた。時勢の機に乗つて、大成を収めると、その豊富な経済力を足がかりに、ある高い地位にいる、貴族に取り入つたのだ。その貴族の娘と恋仲になり結ばれると、国王との謁見の機会を得る。その時までに判明していたモリスンの過去は、王立アカデミーを卒業した前後までだったと言つた。貴族の養子になる裏で、大金が動いた、と言つた説が浮かび上がったほどだ。さて、宮中に出入りが許されたモリスンは金銭にものをいわせて、数多い貴族達を抱き込んでいった。上級貴族ならともかく、下級の貧乏貴族達はモリスンの融資を無下には断れなかった。そうして次第次第に弱みを握られていき、モリスンの覇道を阻む者は宮中では誰もいなくなつた。宮中にて、宰相の位に就くと、まず財政力を固めていった。今よりも商人の出入りを自由にし、輸出入を緩和する

ことよって市場に活気が溢れるようにした。工業を推進し、富国に努めた。ここまでの政策で彼は人心を掌握することに成功した。しかし、彼の野望はそれで満足するに至らなかった。思い通りになるにつれ、野望が膨れ上がる一方だった。その内、当初考えてもいなかった野望にとり憑かれる。

全世界を席捲する。

その想いは、日を追う毎に強くなっていった。

彼はその事に、執着し始めた。今まで 権力に対する執着

以上に。

その頃、ふとある噂話を耳にした。街の酒場で語られるような、他愛も無い噂話だ。

“癒しの村”と呼ばれる場所に、強力な“癒しの力”を持った少女がいる。

誰が何処で語らんでいたのか出所ははっきりしないが、宰相モリスンの耳に入り、彼の心の片隅に留まるだけの効力を持った言葉であった。心の片隅に引っ掛かった“少女”の話題が原因で、食事も喉を通らなくなった頃、彼は漸く動いた。彼は、その噂話が真実か、念入りに調べた。“癒しの力”の信憑性と、その“少女”が実在するのか、その素性を明らかにした。その調査の果てに“少女”の居場所、つまりは“癒しの村”の場所を特定するに至った。そして、例の隠密達を動かしたのだ。「少女」を手に入れ、無事に帰還する」と言う命令を与え……。

だが、よもや失敗しておめおめ逃げ戻ってくるとは。

モリスンは初めて、苦虫を噛み潰すような心境を覚えた。

だが、このままでは終わらせない。“少女” 名をキステイス・カルツという “力”の効果は絶大だ。傷を癒す力というものを軍の中に組み込んだ場合、その効果は絶大なものとなるであろうとモリスンは推測した。まず、兵の士気に関する事がめざましく表れるだろう。傷を受けても直ぐにでも癒せると言う利点があれば、兵は死に対する恐怖を克服する事が出来るだろう。恐怖から解放さ

れば、兵達の士気が向上する。全軍衝突した時の押す力が強まり、戦局が自軍に有利な方向へ大きく動くだろう。兵達が傷を受ける事を恐れなくなり、前線に猪突する者が出て来るだろうからだ。皆、手柄を立てたいのは一緒なのだ。

それだけではない。彼女の“力”は。

“癒しの力”を逆さまに使うと、“破壊の力”が生まれるという話だ。創造と破壊の力は表裏一体、と言うことらしい。つまり、彼女の力を逆さまに使用すれば、大地を溷らせる事も出来るだろう。そう、伝え聞いた。

そこまで思惟を巡らせると、モリスンは決断を下した。

「こうなれば、軍を動かすしかない……わね……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0673x/>

生誕 ~ The wing of the time ~

2011年9月28日03時15分発行